馬見岡綿向神社（うまみおかわたむきじんじゃ）

日野町の最高峰である綿向山(標高1,110m)の頂上に鎮座の綿向大神(天穂日命(あめのほひのみこと))を平安時代初期の延暦15年(796)に里宮として現在の地に遷し祀(うつまつ)り、蒲生上郡の総社として信仰を集めたのが馬見岡綿向神社です。

中世には当地を支配し城下町を築いた蒲生家が氏神として庇護し、さらに江戸時代には全国に雄飛した日野商人が出世開運の神として崇敬しました。

壮大な境内には滋賀県指定文化財の本殿をはじめ、日野商人が寄進した立派な拝殿や絵馬殿・石灯籠・石橋などがあります。

馬見岡綿向神社の神使いは猪、神紋は二羽の雁が雲間に飛んでいる図柄であり、社殿や神輿、曳山の装飾としてあちこちに用いられています。

※綿向神社周辺は混雑しますので、駐車場は日野町役場などをご利用いただきますようご協力をお願いします。

日野祭の見どころ

日野祭囃子

祭囃子には笛、大太鼓、小太鼓、すり鉦の四種類の楽器が用いられ、十六基の曳山すべてが共通して「バカバヤシ」「ヤタイ」「オヤマ」といった代表的な曲目を囃します。

この他にも「ギオンバヤシ」「サガリハ」「カデン」など様々な曲もありますが、町内によってその伝承の状態も様々であり、また、同じ曲目でも町内によって少しずつ違っています。

これら日野祭囃子の源流は関東ではないかと考えられています。日野商人が活躍した江戸時代に、日野と関東各地の出店地を往復していたことにより、関東の祭囃子などを採り入れたのではないかと推測されています。

桟敷窓

綿向神社からお旅所までの本通りに面する家々では、「桟敷窓」が見られます。桟敷窓とは板塀を一部切り取り、中に桟敷を作って、日野祭を見るためだけに開けられた日野独特のものです。